

## 語構造の観点から見た広東語フットの考察

陳 凱 僑

Cantonese Foot  
From the Viewpoint of Its Morphological Characteristics\*

CHEN, Kaiqiao

This contrastive study examines the morphological characteristics of disyllabic constructions in Cantonese and Mandarin from the perspective of Prosodic Morphology. In an effort to interpret Cantonese word structures distinct from Mandarin, the author proposes a bimoraic foot model.

The enduring linguistic conundrum of disyllabification (雙音化 *shuāngyīnhuà*) in Mandarin has increasingly captivated the attention of researchers. Not only do the majority of Mandarin words consist of two syllables, but disyllabic constructions also often serve syntactically as words rather than phrases. Building upon these observations, previous studies posit the existence of a disyllabic foot in Mandarin, functioning as a prosodic template in word formation. However, the applicability of the Mandarin foot to the morphological characteristics of other Chinese varieties remains uncertain. To address this quandary, this paper conducted a comparative analysis of the morphological characteristics of disyllabic constructions in Cantonese and Mandarin. This included Verb-Complement constructions (動補結構 *dòngbǔjiégòu*) and Verb-Object constructions (離合詞 *líhécí*). Notably, the criterion for determining the word status of disyllabic Verb-Object constructions involves assessing whether they can be followed by a direct object. This is explored through a corpus-based examination of Mandarin and a remote questionnaire survey involving Cantonese-speaking respondents. The findings reveal a more pronounced constraint on taking a direct object for Cantonese Verb-Object constructions compared to Mandarin, indicating a stronger inclination for these constructions to function as phrases in Cantonese. We interpret these findings in light of a disparity in foot structures, positing that unlike Mandarin's disyllabic foot, Cantonese incorporates a bimoraic foot,

**Keywords:** Cantonese, Mandarin, word structure, foot, prosodic template  
**キーワード:** 広東語, 普通話, 語構造, フット, 韻律鋳型

\* 本稿は日本語学会 164 回全国大会にて行った口頭発表の内容を基に加筆・修正をしたものである。その際に有益なコメントを頂戴した先生方に感謝申し上げます。また、論文執筆にあたり貴重なご意見を多数頂戴した査読者の先生方に深く御礼申し上げます。最後に、リモート調査の遂行に多大なるご支援をいただいた黄芷欣、李娟々、陳雪儀の各氏及びお忙しい中調査にご協力くださった広東語母語話者の方々に心より感謝の意を表したい。もちろん、本稿における全ての誤りは筆者の責任に帰するものである。



comprising two morae within one syllable. This structural distinction implies that disyllabic constructions in Mandarin are more likely to function as words, whereas they are more commonly analyzed as phrases in Cantonese.

- |                 |                      |
|-----------------|----------------------|
| 1. はじめに         | 4.3. 調査語             |
| 2. 普通話のフット      | 4.4. 調査手順            |
| 2.1. 韻律形態論と韻律階層 | 4.5. 調査結果と考察         |
| 2.2. 普通話フットの提案  | 5. 広東語のフットとその働き      |
| 3. 広東語の語構造      | 5.1. 広東語フットの提案       |
| 3.1. 語の単音節性     | 5.2. 広東語におけるモーラの存在根拠 |
| 3.2. 2音節構造の性格   | 5.3. 音節構造とモーラの扱い     |
| 3.3. 同素異序語の性格   | 5.4. モーラ間の相対的卓立      |
| 4. 離合詞の目的語後続許容度 | 5.5. モーラフットに基づいた解釈   |
| 4.1. 離合詞について    | 5.6. 共通語化との競合        |
| 4.2. 調査協力者      | 6. 終わりに              |

## 1. はじめに

本稿は韻律形態論の観点から、広東語の語構造と韻律の相互関係に焦点を当てる。中国語の共通語である普通話を対象とした韻律形態論の研究は多くあり、その中でも、馮勝利氏（馮 1996, 莊ら 2018）が提案する普通話のフット構造は、多くの研究で採用されている。その一方で、この提案を中国語諸方言にも適用できるのかを考察した研究は殆どない。本稿では、広東語を考察対象と定めた上で、その語構造の特徴に注目して普通話との相違を指摘し、広東語は普通話とは異なるフット構造を持つと提案する。

本稿の構成は以下の通りである。まず第2節では韻律形態論の観点から見た普通話フットに関する先行研究を紹介する。第3節では広東語の語構造に関する先行研究を扱い、普通話との相違点を議論する。第4節と第5節では、筆者が行った広東語離合詞に関する調査を説明した上で、第3節の議論も踏まえつつ広東語は普通話と異なるフット構造を持つと提案する。第6節では本研究のまとめと今後の課題を述べる。

## 2. 普通話のフット

### 2.1. 韻律形態論と韻律階層

韻律形態論（Prosodic Morphology）は、McCarthy & Prince 1986, 1993 などが提唱した音韻部門と形態部門とのインターフェースを研究対象とする理論である。この理論では、語構成などの形態的現象は、韻律階層（prosodic hierarchy）にある韻律単位を基本として行われていると考える。

図1に示すように、韻律階層は4つの単位からなり、下層から見ていくと「モーラ」、「音節」、「フット」、「韻律語」となる。

韻律語 (prosodic word/ $\omega$ )

フット (foot/F)

音節 (syllable/ $\sigma$ )モーラ (mora/ $\mu$ )

図 1. 韻律形態論における韻律階層 (McCarthy &amp; Prince 1993: 45)

a. 軽音節 CV

b. 重音節 CVC/CVV

c. 重音節 CV:

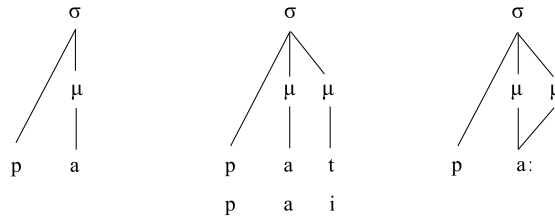


図 2. モーラ数に基づいた音節量の計算

(μ=モーラ, σ=音節)

a. 音節フット

b. モーラフット 1

c. モーラフット 2

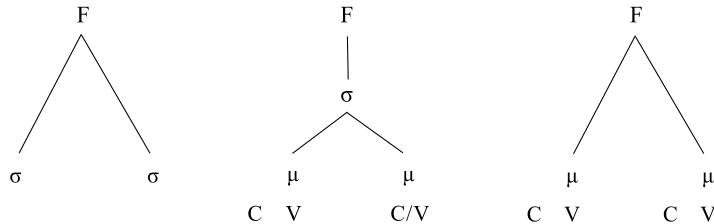
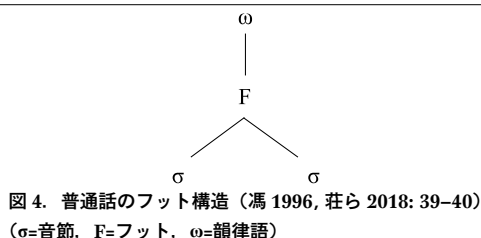


図 3. フットの類型と形式

(μ=モーラ, σ=音節, F=フット, C=子音, V=母音)

まずモーラは、韻律階層における最小の韻律単位とされており、音節の重さ即ち音節量 (syllable weight) を測る単位として働くと考えられる。この考え方では音節量の計算には、頭子音 (onset) は寄与せず、韻 (rhyme) における韻核 (nucleus) や尾音 (coda) などのみに関与するとされる。より具体的には、短母音を持つ CV 音節 (e.g. [pa]) は、1 モーラを持っており軽音節 (light syllable) とされる。それに対して、短母音と尾子音を同時に持つ CVC 音節 (e.g. [pat]), 二重母音または長母音を持つ CVV 音節, CV: 音節 (e.g. [pai], [pa:]) は 2 モーラを持っており重音節 (heavy syllable) とされる。以上をまとめると図 2 のようになる。

次に、フットは韻律階層で音節より大きく韻律語より小さな韻律単位である。フットについて重要なのは、1 つのフットは少なくとも 2 つの下位構成素を必要とする二項性 (foot binarity, McCarthy & Prince 1993: 46) と、下位構成素の間の相対的卓立 (relative prominence) が求められる点である (Liberman & Prince 1977)。フットは、選ばれる下位構成素によって、音節フット (図 3a) とモーラフットの 2 種類がある (McCarthy & Prince 1993: 46)。そのうち、モーラフットは、1 つの重音節 (CVC/CVV/CV:) に収まる 2 モーラ (図 3b) または 2 つの軽音節 (CV) における 2 つのモーラ (図 3c) から構成することができる。また、下位構成素



の間の相対的卓立を満たすために、1 フットを構成する 2 つの音節やモーラは、ある一方がもう一方より際立つ (e.g. 強勢 vs. 弱勢) が必要とされる。

最後に、フットの上位単位である韻律語は音韻論的に定義される語である。1 つの韻律語は、少なくとも 1 つのフットに構成される必要がある (McCarthy & Prince 1993: 46)。ここで注意したいのは、韻律語は必ずしも形態統語論的に定義した語と一致するわけではないが、それと類似した振る舞いをする点である。

上記の韻律階層の他、韻律形態論では以下の仮説も提唱されている (McCarthy & Prince 1993: 1)。まず韻律制限仮説 (The Prosodic Circumscription Hypothesis) によれば、形態的操作 (morphological operation) の適用領域は、形態的基準だけではなく韻律的基準によっても制限されることが可能である。このような韻律的制限は、韻律鋳型 (prosodic template) によって形態的操作に加えられると考える。ここで言う韻律鋳型は Macken & Salmons 1997: 37 によると、語の表層形式に制約を課するような様式化された単位 (conventionalized unit) である。また、韻律形態仮説 (The Prosodic Morphology Hypothesis) によれば、韻律鋳型は図 1 の韻律階層にある 4 つの単位によって定義される。

## 2.2. 普通話フットの提案

多くの先行研究 (呂 1963, 馮 1996, 莊ら 2018 ほか) が指摘したように、普通話 (もしくは現代中国語) の語彙は 2 音節性の傾向を強く持つ。具体的には、この特徴は主に以下の 2 つの側面から確かめられる。【1】普通話の語彙の半数以上が 2 音節で構成されている (莊ら 2018: 7)。【2】普通話では 2 音節構造は単独で使用可能であるのに対して、単音節形態素では単独使用が制限される (呂 1963, 莊ら 2018: 第四章)。呂 1963 が指摘した単音節形態素の単独使用の制限の例としては、2 音節の県名はその後ろに“縣<sup>1)</sup> xiàn”「県」を付けるかどうかは自由だが、単音節地名は後ろに“縣 xiàn”を付けなければならない。具体例を挙げれば、“大興 dàxīng”という県名は、“大興 (縣) dàxīng (xiàn)”のようにその後ろに“縣 xiàn”を付けても付けなくてもよいが、“通 tōng”という単音節県名には、“縣 xiàn”を付けて“通縣 tōngxiàn”としなければならない。

馮勝利氏 (馮 1996, 莊ら 2018) は、上述した普通話の 2 音節性の傾向はフットの観点から説明可能であると考え、図 4 で示すようなフット構造を提案した。その提案によれば、普通話では 2 つの音節が 1 フットを構成し、そして 1 つのフットで 1 つの韻律語が実現する。

馮氏による普通話の音節フットの提案は主に以下のような解釈に基づく。【1】普通話が基盤とする現代北京方言は音節構造が殆ど開音節であるため、1 つの音節では 2 つのモーラを担

1) 本稿では引用した語彙例や文例は一律繁体字表記に変換することにする。グロス付けは原文で付与されていない場合はすべて筆者が付した。また、ローマ字表記は普通話とはピンイン、広東語はイェール粵語拼音に統一する。ただし、音節内のモーラの扱いを説明する際には IPA 表記を使うことにする。

うことができない<sup>2)</sup> (Wang 1993, 馮 2005: 67-70, 莊ら 2018: 63-65)。【2】普通話では語彙の2音節性の傾向が強いだけでなく、2つの音節からなる句も一語に類似した振る舞いが見られる(莊ら 2018: 第4-6章)。【2】の現象に関しては、[動詞+前置詞]の2音節構造(以下、VPr構造)の一語化の例がある。

(1) 普通話のVPr構造[動詞“躺 *tǎng*”+前置詞“在 *zài*”]の一語化(莊ら 2018: 125)

- a. 躺 在 沙發 上  
*tǎng zài shāfā -shàng*  
 寝る 前置詞 ソファ-方位詞  
 「ソファに横になる。」
- b. 躺 在 了 沙發 上  
*tǎng zài -le shāfā -shàng*  
 寝る 前置詞-完了 ソファ-方位詞  
 「ソファに横になった。」

例文(1a)では動詞“躺 *tǎng*”「寝る」と前置詞“在 *zài*”がVPr構造を構成する。(1a)に完了相標識の“了 *le*”を加えると(1b)のようになる。普通話では完了相標識は動詞に直接的に後続するのが一般的であるが、(1b)では“了 *le*”は動詞“躺 *tǎng*”「寝る」ではなく“躺在 *tǎngzài*”「…に横になる」の全体に後続している。この現象について莊ら 2018: 125 は、VPr構造は1つの音節フットを形成するため、1つの動詞として振る舞ったと解釈する。

このように馮らは「普通話のフット構造は音節フットである」という前提に基づきながら、普通話における上記のような事例で2音節構造の一語化が進んでいることを指摘している。では、普通話の韻律構造は中国語の方言にも適用できるのだろうか。本研究では、広東語の語構成における音節数の制限及び2音節構造の文法的振る舞いを考察して、普通話との対照研究を行う。

### 3. 広東語の語構造

#### 3.1. 語の単音節性

広東語は、中国南部の広州、香港とマカオなどの地域に使われている中国語方言である。広東語と普通話の語構造の相違に関してまず注目したいのは、普通話に比べ広東語では語の単音節性が強い点である。例えば、邵・甘 2018 は普通話では2音節だが広東語では単音節である語彙の例を多く示した(表1に一部を挙げる)。

表1を見ると普通話における多くの2音節語は、広東語では単音節語に対応している。さらに、普通話の拘束形態素の多くは、広東語では自由形態素である。一例としては、普通話では“石 *shí*”「石」は“頭 *tou*”などの接尾辞と結びついてはじめて語としての地位を得るが、広東語では“石 *sehk*”「石」は単独で語として使用可能である。

2) 馮勝利氏(馮 2000, 莊ら 2018: 第3-7章)は、漢語史においてフット類型の変遷を経て、音節構造が複雑な上古漢語ではモーラフットを有していたが、中古以降は音節フットに変わりつつあったことを想定しており、古代漢語の再建成果などに基づいた音節構造の通時的な簡素化などを証拠として提示した。中古以降の漢語では、二重母音やVC音節などの存在にも関わらず、音節構造の簡素化によるCV音節の大量発生は、モーラに敏感な言語でなくなり音節をフットの構成素とするようになったことに繋がると馮氏は考える。

表 1. 普通話と広東語における語の音節数の対照 (邵・甘 2018: 104)

和訳	普通話	広東語	和訳	普通話	広東語
石	石頭 <i>shítou</i>	石 <i>sehk</i>	利子	利息 <i>lìxī</i>	息 <i>sīk</i>
骨	骨頭 <i>gǔtōu</i>	骨 <i>gwāt</i>	力	力氣 <i>lìqì</i>	力 <i>lihk</i>
机	桌子 <i>zhuōzi</i>	枱 <i>tóí</i>	色	顔色 <i>yánsè</i>	色 <i>sik</i>
頸	脖子 <i>bózi</i>	頸 <i>géng</i>	衣服	衣服 <i>yīfu</i>	衫 <i>sāam</i>
娘	女兒 <i>nǚér</i>	女 <i>néuih</i>	知る	知道 <i>zhīdào</i>	知 <i>jī</i>
鴨	鴨子 <i>yāzi</i>	鴨 <i>aap</i>	容易	容易 <i>róngyì</i>	易 <i>yih</i>
穴	窟窿 <i>kūlong</i>	窿 <i>lūng</i>	慣れる	習慣 <i>xíguàn</i>	慣 <i>gwaan</i>
蟻	螞蟻 <i>māyǐ</i>	蟻 <i>ngáih</i>	手荒	蠻橫 <i>mánhèng</i>	蠻 <i>màahn</i>

### 3.2. 2 音節構造の性格

次に、普通話では一語と認識された 2 音節句の多くが広東語では依然として句の性格を持つ傾向が見られる点に注目したい。例としてまず 2 音節 VPr 構造の文法的振る舞いを見ていこう。第 2 節で示した (1b) の文を広東語にすると (2) のようになる。

(2) 広東語の VPr 構造 [動詞“瞓 *fan*”+前置詞“喺 *hái*”] と完了相標識“咗 *jó*” (下線部) の組み合わせ

瞓      咗      喺      梳化      上  
*fan*      *jó*      *hái*      *sōfá*      *-seuhng*  
 横になる-完了   前置詞   ソファー-方位詞  
 「ソファーに横になった。」

VPr 構造と完了相標識の組み合わせに注目して (1b) と (2) を対照すると、普通話では完了相標識“了 *le*”が VPr 構造“躺在 *tǎngzài*”「…に横になる」の全体に後続するのに対して、広東語の VPr 構造“瞓喺 *fanhái*”「…に横になる」では完了相標識“咗 *jó*”が中間に挿入されることで VPr 構造の構成素が分離される。この現象は、普通話の VPr 構造では内部構造の分析が行われず全体として一語の性格を有しているが、広東語の VPr 構造では一語化が進まず句としての地位を持つことを反映している。

VPr 構造に加え、[動詞+方向補語] 2 音節構造 (以下、VC 構造) でも広東語は普通話よりも句としての特徴が強い。中国語の方向補語は、動詞の後ろに置かれて動詞の向かう方向を補足的に説明する要素である。高 1980: 49–50 は普通話と広東語の VC 構造の間には、以下のような相違があることを指摘した。(3) で [動詞“出 *chū/cheūt*”+方向補語“去 *qù/heui*”] 構造の具体例を挙げる。

(3) 普通話と広東語における VC 構造と完了相標識 (下線部) の組み合わせ (高 1980: 49)

a. 普通話: 完了相標識“了 *le*”は VC 構造の全体に後続する

他      出      去      了  
*tā*      *chū*      *qù*      *-le*  
 3 単   出る   行く   -完了  
 「彼は出て行った。」

表 2. 普通話・C. E. D 広東語・現代広東語の一部の「同素異序語」の対照（黄 2001）

英訳（C. E. D による）	普通話	C. E. D 広東語	現代広東語
to agree with	符合 <i>fúhé</i>	符合 <i>fúhhahp</i>	合符 <i>hahpfúh</i>
because	因為 <i>yīnwéi</i>	因為 <i>yānwàih</i>	為因 <i>wàihyān</i>
have already	已經 <i>yǐjīng</i>	已經 <i>yíhging</i>	經已 <i>gīngyíh</i>
culinary vegetables	蔬菜 <i>shūcài</i>	蔬菜 <i>sóchoi</i>	菜蔬 <i>choisō</i>
swing	鞦韆 <i>qiūqiān</i>	鞦韆 <i>chāuchīn</i>	韃鞦 <i>chīnchāu</i>

b. 広東語：完了相標識の“咗 *jó*”は VC 構造の間に挿入する

佢 出 咗 去  
*kéuih cheūt -jó heui*  
 3 単 出る -完了 行く  
 「彼は出て行った。」

(3) に示すように，“出去 *chūqù/cheùtheui*”「出ていく」のような VC 構造は、普通話 (3a) では完了相標識“了 *le*”の挿入による構成素の分離は許されないが、広東語 (3b) では許される。このような相違は普通話では VC 構造の一語化が進んでいるが、広東語では構造内部の緊密度が低く句としての地位を有していることを反映しており、両方言間の韻律構造の相違が原因なのではないかと筆者は考える（詳細は第 5 節で述べる）。

### 3.3. 同素異序語の性格

普通話と広東語の語構成のもう 1 つの相違点として、構成素は同じだが順序は異なる 2 音節構造である「同素異序語」の例を挙げる。普通話において 2 つの構成素の順序が固定している構造が広東語では並び方が定着しにくく句に近い振る舞いをすることが多い。黄 2001 は、西洋の宣教師 William Lobscheid が 1871 年に編集した *A Chinese and English Dictionary*（以下、C. E. D）に記録された広東語の「同素異序語」を現代の広東語及び普通話と対照し、広東語の「同素異序語」は最終的に定着するまで構成素の順序は入れ替え可能であったと指摘した。黄 2001 による例を表 2 に整理する。

表 2 のうち，“合符 *hahpfúh*，為因 *wàihyān*，經已 *gīngyíh*，菜蔬 *choisō*，韃鞦 *chīnchāu*”は、現代広東語では順序が逆になるような言い方もあることを筆者は確認した。構成素の順序が定着しにくい「同素異序語」の存在も広東語の語の韻律特性を考える際に重要な言語事実であると筆者は考える。

## 4. 離合詞の目的語後続許容度

以上、前節まで見てきた広東語の特徴から、広東語の語構成では普通話とは明らかに異なる原理に従っている部分があると筆者は考える。さらに本研究では、これらの語構成の違いに関する新たな言語事実として、広東語離合詞の目的語後続許容度に注目した調査を行った。本節では離合詞の概説、調査の方法と結果及び結果に対する考察について詳述する。

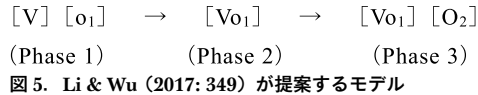


図 5. Li &amp; Wu (2017: 349) が提案するモデル

#### 4.1. 離合詞について

離合詞とは、[動詞＋目的語] の 2 音節から構成される語彙クラスを指す。例えば普通話の離合詞“畢業 *biyè*”は、動詞“畢 *bì*”「完了させる」と目的語“業 *yè*”「学業」からなり、「卒業する」という意味を持ち、また“保密 *bǎomì*”は動詞“保 *bǎo*”「守る」と目的語“密 *mì*”「秘密」から構成して「秘密を守る」という意味を持つ。

離合詞には「目的語が直接的に後続することを制限する」という重要な特徴がある。この特徴に関しては、[動詞＋目的語] 構造を持つ離合詞は既に 1 つの目的語を持っており、それ以上目的語を直接的に後続させるべきではないためと考えられる（王 2018: 77）。しかし一方で、普通話では離合詞に目的語を後続可能な用例が一定程度観察されている。一例として“關心 *guānxīn*”「関心を持つ」という離合詞に目的語を後続する文を（4）に示す。

（4）目的語を後続できる離合詞の例（Li & Thompson 1981: 79）（離合詞は太字，目的語は下線）

我      很      關      心      他  
*wó      hěn      guānxīn      tā*  
 1 単   非常に   関心を持つ   3 単  
 「私は非常に彼のことを気にかける。」

董 2011: 186 は離合詞に目的語を後続できる現象は、離合詞が一語化して内部構造の分析が行われなくなったことを反映していると指摘した。また、離合詞が目的語の後続を許容するようになるプロセスについて Li & Wu 2017: 349 は図 5 のようなモデルを提案した。

図 5 のモデルでは離合詞が目的語の後続を許容するためのプロセスは 3 つの段階を経ると想定する。Phase1 では [V] [o<sub>1</sub>] のような動詞句であるが、Phase2 では内部構造が分析されなくなり [Vo<sub>1</sub>] のように一語化が進み、さらに Phase3 では [Vo<sub>1</sub>] [O<sub>2</sub>] のように目的語の後続が許容されるようになる。

以上のような普通話の特徴を前提とした上で、本研究では広東語における離合詞の目的語後続許容度について調査を行った。

#### 4.2. 調査協力者

調査協力者は 20 代女性の広東語母語話者 12 名である。内訳は広州・香港・マカオの出身者各 4 名である。以下、広州・香港・マカオの地域別でそれぞれ C1-C4, H1-H4, M1-M4 と表記する。

#### 4.3. 調査語

中国で出版された離合詞辞典『漢語常用離合詞用法詞典』（周 2011）に収録されている離合詞 268 語をもとに、先行研究を参考にしながらコーパス調査などを通じて普通話で目的語が後続可能な 42 語を抽出し調査語とする。調査語リストは付録として稿末に付す。



表 3. 目的語が後続可能と 12 名の調査協力者が判断した離合詞の語数とパーセンテージ  
(調査語 40 語, C=広州出身者, H=香港出身者, M=マカオ出身者)

C1	C2	C3	C4	H1	H2	H3	H4	M1	M2	M3	M4
20	14	32	37	22	32	27	17	12	27	22	28
50%	35%	80%	93%	55%	80%	68%	43%	30%	68%	55%	70%

#### 4.4. 調査手順

調査は 2021 年 7 月から 2022 年 8 月にかけて、質問紙アンケートを送付して遠隔的に行った。

調査語 42 語を 12 名の調査協力者に提示し、広東語においても目的語が後続可能かを調査した（以下、目的語の後続許容度を後続度と略す）。広東語においても目的語が後続可能な場合には例文を一文ずつ作成してもらい、筆者がそれらの文に基づき再確認を行った。また、目的語が後続可能と判断したが例文に誤りがある場合は、筆者が目的語が後続する文例を作成して提示し、それらの目的語後続例の適格性について調査協力者に判断してもらい形で再確認を行った。

#### 4.5. 調査結果と考察

調査語として使った普通話離合詞の 42 語のうち、広東語で 2 語が日常的に使われないと判明したため考察対象から除外し、残りの 40 語の後続度を調査した。

表 3 では目的語を後続可能と判断した離合詞の語数を調査協力者ごとにまとめる。今回の調査語は普通話では全て目的語が後続可能なのだが、広東語における後続度は全体の平均値を見ると約 24.2 語で語全体の約 60.4%にとどまるという結果が得られた。この結果は、普通話に比べ広東語では目的語の後続がより強く制限されることを強く示唆している。

このように普通話の離合詞は一語化が進んで目的語が一定程度後続できるようになったのに対して、広東語では一語化がそれほど進んでおらず、目的語の後続に対する制限が依然として働いている。これらの結果も広東語の韻律構造について重要な示唆を持っていると筆者は考える。次節では広東語のフット構造を考察しよう。

### 5. 広東語のフットとその働き

#### 5.1. 広東語フットの提案

第 2 節で述べたように普通話の語構成ではフットなど韻律要素の働きが重要であることが繰り返し指摘されているが、広東語では語構成の特徴からフット構造を議論した研究は管見の限りでは皆無である。本研究では、「語の単音節性がより強く保持されており、2 音節構造が句の性格を持ちやすい」という広東語の特徴に注目し、広東語はモーラフットを有すると提案する。本提案は、広東語では 1 音節に収まる 2 モーラが 1 フットを構成し、そして 1 フットで 1 つの韻律語が実現すると主張する（図 6 参照）。

次節から、先行研究で提示された広東語におけるモーラの存在根拠を示した上で、本提案における音節とモーラの扱い、モーラ間の相対的卓立などについて詳述する。

#### 5.2. 広東語におけるモーラの存在根拠

広東語におけるモーラの存在根拠は、Yip 1992: 25–27 が英語からの借用語の音節構造に基

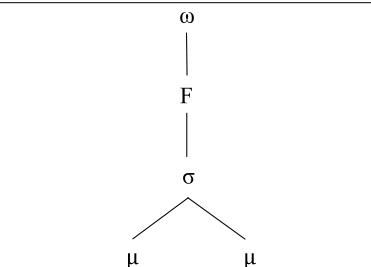


図 6. 広東語のフット構造<sup>3)4)</sup>  
(μ=モーラ, σ=音節, F=フット, ω=韻律語)

づいて提示している。英語の母音は長短の対立を持っており、例えば *letter* の第 1 音節における *e* は短母音 (1 モーラ) で、*soda* の第 1 音節における *o* は長い二重母音 (2 モーラ) である。

(5) 英語 VCV → 広東語 VC.CV (a と b は語強勢の位置が異なる)

a. *cópy* k<sup>h</sup>ap<sup>55</sup> p<sup>h</sup>i<sup>35</sup> shú<sup>55</sup> tsa<sup>35</sup>  
*létter* let<sup>55</sup> t<sup>h</sup>a<sup>35</sup>

b. *guitá* ki<sup>33</sup> t<sup>h</sup>a<sup>55</sup> comí<sup>33</sup> sion m<sup>i</sup><sup>55</sup> sön<sup>35</sup>

(6) 英語 VVCV → 広東語 V.CV (音声的には [V:CV])

*market* ma<sup>55</sup> k<sup>h</sup>et<sup>35</sup> *yoga* yü<sup>21</sup> ka<sup>55</sup>  
*soda* so<sup>55</sup> ta<sup>35</sup> *major* me<sup>55</sup> tsa<sup>35</sup>  
*motor* mo<sup>55</sup> ta<sup>35</sup> *foreman* fo<sup>55</sup> man<sup>35</sup>

(5) に示したように、第一音節に短母音を持つ英単語 (VCV 構造) は、広東語に借用されると、その短母音の直後に来る子音 (下線部) が重複 (geminate) して、VC.CV 構造で借用される。一方で (6) に示した通り、第一音節に長母音または二重母音を持つ英単語 (VVCV 構造) は、広東語に借用されると、(5) のような子音 (下線部) の重複が観察されず、V.CV (音声的には V:CV) 構造で借用されている。上記の現象に対して Yip 1992: 26 は、広東語の音節は全て

3) 図 6 のモデルでは、モーラではなく音節がフットの直接構成要素であるため、「広東語はモーラを単位とするフット構造を有する」という主張を正確に反映できないのではないかと、査読者に指摘していただいた。筆者がこのモデルを提案したのは、広東語では 1 フットを構成する 2 モーラが常に 1 音節に収まることを反映させたいからである。また、本モデルでは、モーラはフットの間接的な構成要素ではあるがその二項性と相対的卓立を直接的に反映するものでもあるため、「モーラを単位とする」ということを反映できると考える。

4) 査読者より、「フット概念の有効性、必要性については、北京語は 2 音節語を好む傾向にあり、よって音節より大きい韻律的単位が実在し、このような単位を表す概念としてフットが必要で、有効であるが、広東語のフット構造が 1 音節であるとすれば、「音節=フット」という関係となり、あえてフット単位を別に認める積極的な理由はないかあるのでしょうか」というコメントをいただいた。ここで査読者が言及された「音節より大きい韻律的単位」とは、「複数の音節からなる韻律的単位」(e.g. 北京語が好む 2 音節からなる韻律的単位) のことを指すのではないかと筆者は理解している。実際には、韻律階層にある上位単位は、必ずしも複数の下位単位からなる (下位階層より大きい) とは限らない。極端に言うと、たったの 1 音節であっても、1 つの発話 (Utterance, 音律音韻論 (Prosodic Phonology) における韻律階層の最上位単位) を構成することができる (張 2014: 313-314)。この場合には発話 (上位単位) は複数の音節 (下位単位) からなるものではない。それゆえに、「(2 モーラを持つ) 1 音節で 1 フットを構成する」ということは、「フット単位を認める必要性がない」ことに繋がることはできないと筆者は考える。

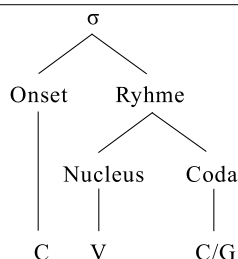
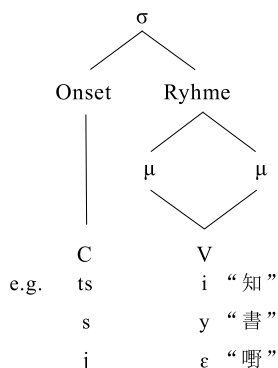


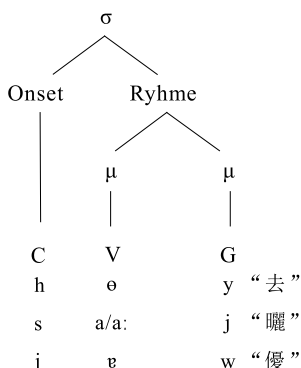
図 7. 広東語の音節構造

(σ= 音節, Onset=頭子音, Ryhme=韻, Nucleus=韻核, Coda=尾音, C=子音, V=母音, G=わたり音)

a. CV 音節 (音声的には CV:)



b. CVG 音節



c. CVC 音節

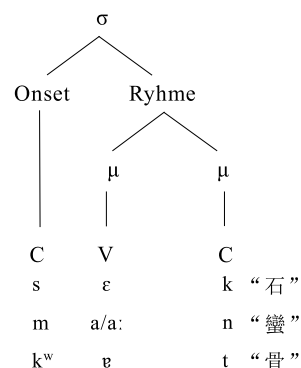


図 8. 広東語の音節におけるモーラの扱い

2 モーラからなり、英語の短母音を借用する際にはこの広東語の韻律的制限を満たすために、直後の子音の重複 (gemination) が発生すると解釈した。これではじめて短母音 (1 モーラ) と尾子音 (1 モーラ) が広東語に適格な 1 音節 (2 モーラ) を構成できるというわけである。

Yip の研究は、広東語はモーラに敏感な言語であることを支持する証拠を提示しており、筆者もこの主張に基づいて「1 音節=2 モーラ」と仮定してフットの考察を行う。

### 5.3. 音節構造とモーラの扱い

本節では広東語の音節構造を踏まえつつ、モーラフットの提案におけるモーラの扱いを説明しよう。まず、広東語音節の最大構造は、図 7 に示すように  $(C)_{\text{Onset}} + (V_{\text{Nucleus}} + C/G_{\text{Coda}})_{\text{Ryhme}}$   $\sigma$  である<sup>5)</sup>。

この音節構造をもとにすると、広東語の音節におけるモーラの扱いは図 8 のように説明できる。CV 音節 (図 8a) では韻核の単母音 V が音声的に長く実現するため、2 モーラを持つ。また、CVG 音節 (図 8b) または CVC 音節 (図 8c) では、韻核と尾音がそれぞれ 1 モーラを持つ。

広東語における CVG 音節や CVC 音節では、 $a[v]$  と  $aa[a/a:]$  という母音の長短対立が存在するという説もあるが (e.g. 曬  $sai[saj/sa:]$  「曝す」 vs. 細  $sai[sɛj]$  「小さい」), IPA 表記からも分かるように両者の音色にも相違があり、長短は唯一の弁別的対立ではない。それゆえに本研究では、 $a[v]$  と  $aa[a/a:]$  両方ともに 1 モーラを持つとする。

5) 介音は  $-w[-w-]$  があるが、 $g[k-]$  と  $k[k^h-]$  とのみ共起するため、一般的に子音  $g^w[k^w-]$  と  $k^w[k^{wh-}]$  と解釈される。

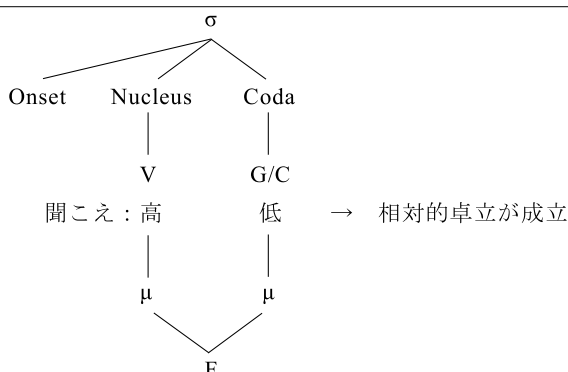


図 9. モーラ間の相対的卓立

(μ=モーラ, σ=音節, F=フット, V=母音, G=わたり音, C=子音)

#### 5.4. モーラ間の相対的卓立

前節では広東語における 1 音節に 2 モーラが収まる可能であることを論証した。では、2 つのモーラはどのような相対的卓立の関係でフットを構成しているのか。本研究では、端木 1999 の考えに沿い、聞こえ (sonority) の相違によってその相対的卓立が成立すると解釈したい。

Ladefoged 1982/2006: 239 によれば聞こえとは「同じ長さ、強勢とピッチであることを条件にした、他の音と比べてのある音の大きさである。(The sonority of a sound is its loudness relative to that of other sounds with the same length, stress and pitch.)」三省堂『明解言語学辞典』(p. 25)によると、「聞こえの高いものから低いものを並べると、母音が最も高く、わたり音 (w, y), 流音 (r, l), 鼻音 (m, n), 摩擦音 (v, z, f, s) と続き、閉鎖音 (b, d, g, p, t, k) が最も低い。」この尺度に沿って広東語の音節内の音素配列を見ると、韻核 (nucleus) に当たる母音は、尾音 (coda) に当たるわたり音や子音 (内破音または鼻音) に比べ聞こえが高いことが分かる。このような聞こえの差によってモーラ間の相対的卓立が成立すると考えられる (図 9 参照)。

また、CV 音節 (音节的には CV: 音節) についても、韻核に当たるモーラは尾音に当たるモーラより聞こえが高いことが普遍的である (端木 1999: 248)。広東語における CV 音節もこのような聞こえの差によって相対的卓立が成立していると考えられる<sup>6)</sup>。

#### 5.5. モーラフットに基づいた解釈

前節までモーラフットの提案について詳しく説明してきたが、本節では先行研究で指摘された普通話の語構造におけるフットの働きと対照させながら広東語の語構成を考察しよう。

第 2 節から第 4 節まで指摘したように、普通話では語の性格を持ちやすい 2 音節構造が広東語では句の性格を持ちやすくなることが観察された。この現象は、両方言間で異なるフットがそれぞれ語構成の際の韻律鋳型 (prosodic template) として機能した結果であり、具体的

6) 実際、その一方で、馮勝利氏が提案した音節フットは、査読者にご指摘いただいた通り 2 音節語を好む傾向性を解釈する際に有効性が見られる一方で、フットを構成する 2 音節間の相対的卓立の存在を支持する証拠が未だに足りないため、あくまでも有名無実の概念ではないかという批判の声もあり (李・王 2017: 184–185)、普通話においてはフットを定義するための相対的卓立を欠くため、フットという韻律単位は存在しないという反論もある (張 2014: 308–310)。

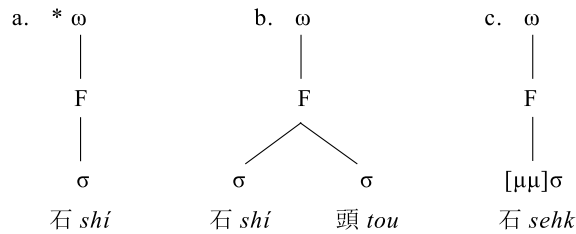


図 10.

(μ=モーラ, σ=音節, F=フット, ω=韻律語)

には韻律鋳型（1 フット、そして 1 韻律語）にはめ込む構造は 1 語として成立しやすく、逆にその鋳型にはめ込んでいない構造は 1 語として成立しにくいと筆者は考える。従って、普通話では音節フットという韻律鋳型が働いているため、単音節構造が自立語になりにくく、2 音節構造が 1 語として成立しやすい。それに対して、広東語ではモーラフットという韻律鋳型が機能するため、単音節構造が 1 語として自立しやすく、2 音節構造が 2 つの語からなる句と分析されやすい。

上記の考え方で両方言間の語構造の相違を見てみよう。まず、普通話では 2 音節だが広東語では単音節である語彙が多数存在するという 3.1 節で述べた現象は、フット構造の相違で解釈可能である。例えば、普通話では“石 shí”「石」は単音節で韻律鋳型（1 つの音節フット、そして 1 韻律語）にはめ込んでいないため語になれず（図 10a）、接尾辞“頭 tou”と結びついた 2 音節構造で 1 つの音節フットにはめ込んではいじめて語としての地位を得るが（図 10b）、広東語では“石 sehk”「石」は単音節でも 1 つのモーラフット（そして 1 韻律語）にはめ込む可能であり自立語になれる（図 10c）。

さらに、「普通話では語に近い振る舞いをする 2 音節構造が広東語では句に近い振る舞いをする」という第 2 節から第 4 節まで述べた現象についても両方言間のフット構造の相違で解釈可能である<sup>7)</sup>。具体的には、VPr 構造、VC 構造、同素異序語や離合詞などの 2 音節構造は、普通話では語構成の韻律鋳型即ち 1 つの音節フット（そして 1 韻律語）にはめ込んでいるため語と解釈されやすい（図 11a）のに対して、広東語ではその 2 つの音節がそれぞれ 1 つのモーラフット（そして 1 韻律語）にはめ込んでいるため、全体的には句と分析されやすい（図 11b）。

このようなモーラフットの韻律的働きのため、図 12 に示すように、広東語で動詞句（VP）と分析されやすい離合詞は、既に 1 つの目的語（O<sub>1</sub>）を持っているため、もう 1 つの目的語（O<sub>2</sub>）の後続がより強く制限されていると筆者は考える。

## 5.6. 共通語化との競合

前節では広東語離合詞における目的語の後続制限はモーラフットの韻律的関与によると述べたが、4.5 節の調査結果を見ると目的語が後続可能な離合詞も一部存在する。広東語においてそれらの離合詞が目的語の後続をより許容しやすいことは、普通話からの影響を受けたことが一因だと筆者は考える。

7) 広東語の語構造に関するデータは、査読者のご指摘のようにいずれもモーラフットに基づく提案の間接的証拠ではあるが、積み重ねによって有効な証拠にもなると筆者は考える。また、「同素異序語」における構成素の順序が方言間で異なるのは、その他の形態・統語的な要因などありえるかとも考えられるが、今後の課題としたい。

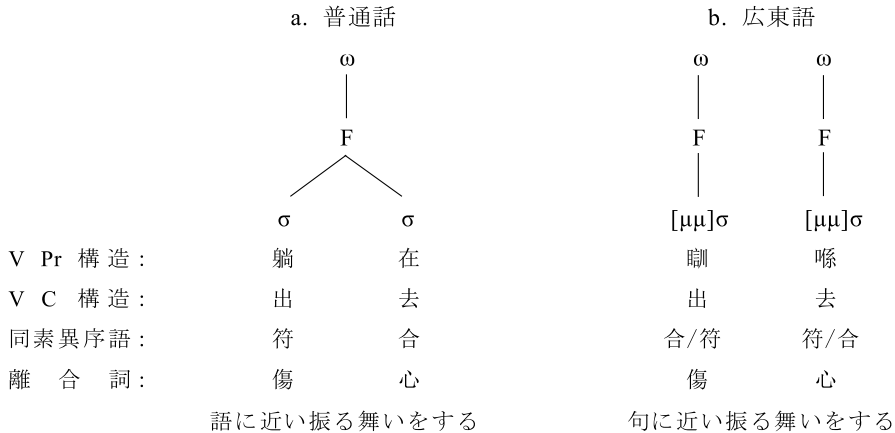


図 11.

(μ=モーラ, σ=音節, F=フット, ω=韻律語)

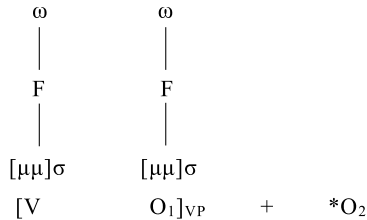


図 12.

(VO<sub>1</sub>=離合詞, O<sub>2</sub>=離合詞の目的語, VP=動詞句, μ=モーラ, σ=音節, F=フット, ω=韻律語)

その 1 つの証拠としては、広東語において目的語の後続が文語（普通話を基盤とする中国語の標準書記書式）的な発話では許容されやすいが日常的な口語では許容されにくいような離合詞が観察される。広東語の離合詞“待業 *doih-yihp*”を一例として挙げる。

(7) 広東語離合詞“待業 *doih-yihp*”の目的語後続例（目的語は下線部）

- a. 待 業      家中  
*doih-yihp*    *gā-jūng*  
 就職をまつ 家-方位詞  
 「家で就職を待つ。」
- b. \*待 業      屋企  
*doih-yihp*    *ūkkéi*  
 就職をまつ 家  
 「家で就職を待つ。」

「家」は普通話では“家 *jiā*”，広東語の口語では“屋企 *ūkkéi*”と言うが、文語的な発話では“家 *gā*”とも言う。広東語離合詞“待業 *doih-yihp*”は、文語的な発話（7a）では目的語“家中 *gā-jūng*”の後続が一部の調査協力者で許容されたが、“屋企 *ūkkéi*”は後続が許容されない（7b）。このような目的語の後続が文語的な発話では許容されやすいが口語では許容されにくい離合詞の存在は、広東語離合詞の目的語後続は韻律構造に制限される同時に普通話からの影響を受けていることを反映していると筆者は考える。

## 6. 終わりに

本研究は、「普通話のフット構造は音節を単位とする」という馮勝利氏（馮 1996, 莊ら 2018: 39–40）の提案が中国語諸方言でも通用するのかを考察する第一歩として、広東語の語構造における韻律の関与に焦点を当てた。語構造の音節数制限や VPr 構造・VC 構造・「同素異序語」などの 2 音節構造の文法的振る舞いのほか、離合詞の目的語の後統許容度に関しても両方言間に違いが存在することが確認された。これらの相違は普通話では語と認識されやすい 2 音節構造が広東語では句と分析されやすいことを反映している。以上の証拠から、広東語のフット構造は普通話と同じような音節フットではなく、モーラフットと提案したほうがより妥当であると筆者は結論付ける。

今後の課題として、「広東語のフット構造はモーラを単位とする」という提案に対するより多くの側面からの検証と広東語以外の中国語方言での追加的な考察が必要である。さらには、韻律形態論の理論に基づいて多くの言語における形態的現象を考察した研究が多くあるが、これらの研究と関連させた議論も期待したい。

## 参考文献

- Ladefoged, Peter. 1982/2006. *A course in phonetics* (5<sup>th</sup> Edition). Boston: Thomson Wadsworth.
- Lobscheid, William. 1871. *A Chinese and English Dictionary*. Hongkong: Noronha.
- Li, Charles N., and Thompson, Sandra A. 1981. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Li, Yanzhi, and Wu, Yicheng. 2017. “On The Evolutionary of Disyllabic Transitive Verbs in Chinese.” *Journal of Chinese Linguistics*, 45(2): 344–393.
- Liberman, Mark, and Prince, Alan. 1977. “On Stress and Linguistic Rhythm.” *Linguistic Inquiry*, 8(2): 249–336.
- Macken, Marlys A., and Salmons, Joseph C. 1977. “Prosodic templates in sound change.” *Diachronica*, 14(1): 31–66.
- McCarthy, John J., and Prince, Alan. 1986. “Prosodic Morphology.” MS, University of Massachusetts and Brandeis University.
- . 1993. “Prosodic Morphology: Constraint Interaction and Satisfaction.” *Linguistics Department Faculty Publication Series*, 14. Available at [https://scholarworks.umass.edu/linguist\\_faculty\\_pubs/14](https://scholarworks.umass.edu/linguist_faculty_pubs/14).
- Wang, Jenny. 1993. “The Geometry of Segmental Features in Beijing Mandarin.” Ph. D. Dissertation, University of Delaware.
- Yip, Moria. 1992. “Prosodic morphology in four Chinese dialects.” *Journal of East Asian Linguistics*, 1: 1–35.
- 董秀芳 2011『詞彙化：漢語雙音詞的衍生和發展（修訂本）』北京：商務印書館。
- 端木三 1999「重音理論和漢語的詞長選擇」『中國語文』4: 246–254。
- 馮勝利 1996「論漢語的“韻律詞”」『中國社會科學』1: 161–176。
- 2000「漢語雙音化的歷史來源」『現代中國語研究』1: 123–138。
- 2005『漢語韻律語法研究』北京：北京大學出版社。
- 高華年 1980『廣州方言研究』香港：商務印書館。
- 黃小姪 2001「廣州方言異序詞的百年演變」『廣州大學學報（綜合版）』15(7): 63–69。
- 李 兵・王曉培 2017「韻律構詞學與漢語構詞中的韻律結構問題」『歷史語言學研究』1: 175–202。
- 呂叔湘 1963「現代漢語單雙音節問題初探」『中國語文』1: 10–22。
- 邵慧君・甘于恩 2018『粵語詞彙講義』香港：商務印書館。
- 王 俊 2018『現代漢語離合詞研究』長春：東北師範大學出版社。
- 張洪明 2014「韻律音系學與漢語韻律研究中的若干問題」『當代語言學』3: 303–327。
- 周上之 2011『漢語常用離合詞用法詞典』北京：北京語言大學出版社。

莊會彬・趙璞嵩・馮勝利 2018『漢語の雙音化』北京：北京語言大學出版社。

齋藤純男・田口義久・西村義樹編 2015『明解言語学辞典』三省堂。

### ●中国語コーパス●

北京大學語料庫 (CCL) [http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/)

語料庫在線・現代漢語語料庫檢索 <http://corpus.zhonghuayuwen.org/CnCindex.aspx>

採択決定日—2023 年 10 月 31 日

### 付録 調査語リスト

安心 <i>ānxīn</i> 'relieve-mind' 「安心する」	留神 <i>liúshén</i> 'hold-spirit' 「気を付ける」
保密 <i>bǎomì</i> 'keep-secret' 「秘密を守る」	留心 <i>liúxīn</i> 'hold-mind' 「心がける」
報名 <i>bàomíng</i> 'tell-name' 「申し込む」	留學 <i>liúxué</i> 'study abroad-study' 「留学する」
貶値 <i>biǎnzhí</i> 'reduce-value' 「切り下げる」	留意 <i>liúyì</i> 'hold-attention' 「留意する」
操心 <i>cāoxīn</i> 'operate-mind' 「気を遣う」	埋頭 <i>máitóu</i> 'conceal-head' 「没頭する」
插嘴 <i>chāzuǐ</i> 'insert-words' 「口出しする」	命名 <i>mìngmíng</i> 'assign-name' 「命名する」
出差 <i>chūchāi</i> 'go out-business' 「出張する」	起草 <i>qǐcǎo</i> 'work out-draft' 「起草する」
出境 <i>chūjìng</i> 'go out-border' 「国境を出る」	入境 <i>rùjìng</i> 'enter-border' 「入境する」
待業 <i>dàiyè</i> 'wait-occupation' 「就職をまつ」	入學 <i>rùxué</i> 'join-school' 「入学する」
擔心 <i>dānxīn</i> 'undertake-mind' 「心配する」	傷心 <i>shāngxīn</i> 'hurt-feeling' 「傷心する」
點名 <i>diǎnmíng</i> 'call-name' 「出席を取る」	伸手 <i>shēnshǒu</i> 'stretch out-hand' 「手を出す」
定性 <i>dìngxìng</i> 'decide-nature' 「性質を定める」	生氣 <i>shēngqì</i> 'cause-anger' 「怒る」
發愁 <i>fāchóu</i> 'show-worry' 「心を痛める」	提名 <i>tímíng</i> 'bring up-name' 「指名する」
放心 <i>fàngxīn</i> 'place-mind' 「放心する」	問好 <i>wènzhāo</i> 'ask after-good' 「機嫌を伺う」
分工 <i>fēngōng</i> 'assign-labour' 「分業する」	下令 <i>xiàlìng</i> 'issue-order' 「下命する」
掛鉤 <i>guàgōu</i> 'hang-hook' 「連結する」	獻身 <i>xiànrēn</i> 'dedicate-life' 「献身する」
還原 <i>huányuán</i> 'resume-original' 「還元する」	消毒 <i>xiāodú</i> 'dispel-toxin' 「消毒する」
匯款 <i>huìkuǎn</i> 'remit-money' 「送金する」	行賄 <i>xínghuì</i> 'do-bribe' 「贈賄する」
加工 <i>jiāgōng</i> 'increase-work' 「加工する」	宣誓 <i>xuānshì</i> 'declare-oath' 「宣誓する」
加熱 <i>jiārè</i> 'increase-heat' 「加熱する」	増産 <i>zēngchǎn</i> 'increase-product' 「増産する」
減産 <i>jiǎnchǎn</i> 'reduce-product' 「減産する」	做客 <i>zuòkè</i> 'be-guest' 「ゲストとなる」

※ “發愁 *fāchóu*” 「心を痛める」と “生氣 *shēngqì*” 「怒る」の2語が広東語で日常的に使われないと判明。